

初期ハイデッガーと論理学

田 中 末 男

はじめに

初期ハイデッガー——ここでは『存在と時間』(1927年)以前のハイデッガーをさす⁽¹⁾——の思惟は、これまでただ『存在と時間』のための準備作業として、やがてそこへ止揚されていくべきもののように考えられてきた。しかしこの時期のかれの関心事が、主に論理学にあったという事実は、⁽²⁾これをそのまま『存在と時間』に結びつけて考えることを躊躇させるものをもっている。なぜならこの作品は、普通の意味での論理学とも初期ハイデッガーが関わった認識論的論理学ともいささか肌合いが違うからである。他方、後期ハイデッガーがことばへの省察を深めていったという事実がある。これを初期ハイデッガーの論理学的関心と関係づけると、ともにロゴスへの関心とみることができる。いわゆる「転回」以降のかれの思惟がかれにとってならん後退とか逸脱ではなく、本来の道への立ち帰りであるとするならば、この時期の思惟のなかにすでにかれが本来めざそうとしたものの萌芽が潜んでいたのではないかと推測されうる。少なくともこの時期のハイデッガーはさまざまな可能性を秘めており、単純に『存在と時間』の前段階とみなすことはできないのである。むしろ『存在と時間』はその可能性のなかの一つの選択の結果にすぎなかったと言いうるかもしれない。ハイデッガー哲学の原点ともいべき初期の思惟を固有の権利要求をもった思惟として見直すことは、その後の紆余曲折に富んだかれの思惟の軌跡を辿るうえで重要な導きの糸を提供してくれるように思われる。⁽³⁾

ハイデッガーがかれの根本問題である「存在の問い」に目覚めたのは、ブレンターノの『アリストテレスにおける存在者の多様な意義について』によってであるが、⁽⁴⁾存在者の在り方の問題と、それがいかに語られうるかの問題が不可分であることはかれに当初から意識されていたのである。だからまた『存在と時間』においても「〈ある〉という語で本来何を思念しているのか」まるで分からなくなってしまうと嘆くプラトンの『ソフィステース』からの引用で始まるのである。⁽⁵⁾ハイデッガーにおいてこのように存在はつねにことばとの絡みにおいて問われているのである。ただ初期においてはこのことばがそれ自身としてではなく、論理学的ロゴスとして前面にでてきていたのである。このような問題意識がどのように生まれ、どう展開し、またかれの思惟をどのような方向へ導いていったのかが以下の論究の主題である。

1

ハイデッガーの最初の著作は、学士論文として書かれた「心理主義における判断論——論理学

への批判的一積極的寄与」(1914年)である。彼がこのテーマを選んだのは、論理学がおよそ哲学するものにとってまず身につけるべき基礎的素養であるといった一般的事情や、彼がリッカートの下で学んでいたという個人的事情のほかに、当時の思想的状況が大きく影響していたと思われる。それは近代科学がその対象を物質界から生物界にまで広げ、19世紀後半にはさらに人間の内面世界にまでそれが及んできたのである。この科学的心理学の誕生によって、それまでいわば哲学の固有の領土であったところの主権があやしくなった。これに対して当然、哲学の側からなんらかの自己防衛反応が起こった。そのひとつは、心理学の諸成果を積極的にとりいれてその傾向を合理化する動きである。他方はそれとは反対に、心理学の攻勢に対抗して自らの固有の領土を守ろうとする動きである。前者が、心理主義と呼ばれるもので、W. ヴントやF. ブレンターノそれにTh. リップスなどがこれに属する。後者の反心理主義の立場に立つのが、ハイデッガーの師であるH. リッカートやのちに師となるE. フッサールであった。当然ハイデッガーも後者の立場に立つことになる。

哲学の側において最初に心理主義の攻勢を受けるのは、論理学である。なぜなら論理学は、「思惟作用の理論」(5)⁽⁶⁾であり、この作用はまさしく心理的なものの名に十分値するからである。心理主義は、論理的なもの、たとえば同一律や矛盾律のような論理学の法則を、思惟作用の心理的発生のメカニズムから説き明かそうとする。しかしハイデッガーによればこうした実在的(real)で経験的な事実をいくら積み重ねても、論理法則がもつ普遍性に到達することはできない。この法則は、理念的(ideal)でアプリアリな性格を持つものである。むしろこうした区別は、カントを引き合いにだすまでもなく哲学においていわば常識に近いものである。それをあらためて確認し、守らねばならないのは、それだけ「心理学の時代」として心理学的思考方法が、哲学に対して新鮮かつ強烈なインパクトを与えたからに他ならない。反心理主義の動きは、したがって従来の主張をただちに繰り返すのではなく、論理学の改革へと進まざるをえなかったのである。⁽⁷⁾ハイデッガーが従来の論理学的思考方法を踏襲している新カント学派より、立場としてはむしろフッサールに傾きかけているのもそのためである。「だがまさにフッサールの原理的かつきわめてうまく形式化された研究が、心理主義的魔力を打ち破り、論理学とその課題の解明の道を開いた」(6)。

もっともフッサール自身もかつて『算術の哲学——心理学および論理学的研究——』(1891年)において心理主義の立場に立っていた。彼はそこで数というものを「数える」という心理的行為から基礎づけようとしたのである。だがやがて彼は『論理学研究』(1900年)において正反対の論理主義の立場に立ち、真っ向から心理主義を批判することになる。その第一巻が「純粹論理学序説」と題され、フッサールは論理的なものの純粹にしてアプリアリな性格を擁護するのである。ハイデッガーが心理主義問題に取り組んだ当時はすでに、フッサールや新カント学派の手によってこの問題に一応の決着が図られていたことは、ハイデッガー自身も認めるところである。にもかかわらず彼が改めてこの問題を取り上げたのは、陥りやすい誤

謬を避けるのを目的とした「論理的予備学」(6)としてだけではない。それはフッサールのこの問題をめぐる動揺を——たんに『算術の哲学』と『論理学研究』との間だけでなく、フッサールの哲学的全人生を貫いている——ハイデッガーは、実存的問題として受けとめたからだと思われる⁽⁸⁾。ハイデッガーはここで心理主義をたんに外から批判するのではなく、まずその考え方に自ら同化し、その中から内在的に乗り越えるしか道はないと考えたからに他ならない。「純粹論理学」の理念も、抽象的—形式的論理学をふたたび構築することではなく、あくまで純粹性を守りつつ実在界へのかかわりを自らのうちに含む「存在—論理学」であるということが、その後のハイデッガーの思惟の展開にとって決定的に重要なことである。

さて、ハイデッガーは論理学をめぐる心理主義との論戦の舞台を判断論に設定する。なぜ判断かといえば、「正当にも論理学の細胞として、すなわち原基としてみなされる判断において、もっとも先鋭的に心理的なものと論理的なものとの区別が明らかにされるに違いないからであり、判断から論理学の本来的構築が遂行されねばならないからである」(6, vgl. 210)。判断が思惟作用の中核に位置することは間違いないであろう。ハイデッガーによれば、心理主義者たちはこの判断を次のようにとらえる。W.ヴントは、「判断は統覚的精神活動の根本性質から導き出される」(第1章)とし、H.マイヤーは「判断の本質は、判断活動にとって構成的な作用のうちに求められる」(第2章)と考え、F.ブレンターノやA.やマルティは「判断は、心理現象の根本クラスのひとつとして特徴づけられる」(第3章)とし、最後にTh.リップスは「判断の本質は、対象によって要求された心理主義の態度に存する」(第4章)と考えたのである。ハイデッガーはこれらを詳細に批判し、そこから次の結論を導きだす。「判断の問題性は、心理的なものには存しない」(106)こと、そして論理学の領域での心理主義は、「論理的対象の固有現実性(Eigenwirklichkeit)の誤解の下にある」(102f.)というものである。

これが「論理学への批判的—積極的寄与」のうちの批判的部分の結論である。では積極的寄与とはどういうことか。論理的なものとは、心理的なものでもまして物理的なものでもないが、とはいえ「対して立っている何か」である。その現実性(Wirklichkeit)を否定することはできない。ではいかなる現実性か。心理的あるいは物理的現実性が実在的現実性と呼ばれ、それらは時間のなかで経過し、生成・変化・消滅を免れることができないものである。それらの存在は、現実存在(Existieren)の意味での「ある」である。それにたいして論理的なものそれは、理念的現実性と呼ばれる。その存在を、ハイデッガーはロツェにならって妥当(Gelten)として規定する。この妥当するものが、意味(Sinn)と呼ばれ、意味は論理的なものの「具体化」(114)である。ただハイデッガーはこの論理的な意味について「それは証明される(beweisen)ことはできず、ただ提示される(aufweisen)のみである」(107)と述べそれ以上の展開はしていない。意味において「おそらく我々は最終的なもの、還元不能なもの、それについてさらなる解明が締め出されているもの、それについてどんな問いも窮地に陥るものに立っている」(112)とされる。だがそれ以上遡りえないものに到達したということによってすべてが解決

したわけではない。むしろ逆でありそこからようやく第一歩が始まるのである。ただハイデッガーはまだその分析のための手がかりを掴んでいない。ここにこの段階での彼の限界がある。もっともハイデッガーは意味を構造的に捉え、その関係性をコブラのなかにみている点にのちの展開のための足場がある。ここでは意味をフッサール現象学のノエスーノエマ構造として捉え、その担い手としてコブラを位置づけたのである。コブラとしての「ある」は、現実存在としての「ある」からの派生態などではなく、固有現実性を持っているのである。ハイデッガーはここでロツェの妥当性理論をフッサール現象学によってダイナミックに解釈しようと試みているように思われる。すなわちコブラとしての「ある」は、静的・形式的なものではなく、能動的な関係づけの作用である。認識作用は対象支配の働きであり、コブラとしての「ある」は、これを実現しているのである。

2

学士論文につづいてハイデッガーは、教授資格論文「ドゥンス・スコトゥスのカテゴリー論および意義論」を1915年に書き上げ、「結び」の章を付け加えて翌年出版する。これはH. リッカートに捧げられたものである。表題が示すように、これはカテゴリー論と意義論の二部構成になっている。前者については、括弧して「意義論の理解の体系的基礎づけ」という副題がつけられていることから窺われるように後者のための準備的性格をもち、むしろ後者の意義論のほうに重点がおかれている。そして意義論は学士論文のテーマ、すなわち妥当する意味の問題との関連からでてきた問題であるということができる。ハイデッガーは、意味と意義の問題性をここでもっと掘り下げようとしたのである。そのためにはまず、カテゴリー論すなわち対象性一般の理論をうちたて、その上に意義論を位置づける必要があったのである。カテゴリー論は意義論のための「本来の下部構造」(154)をなし、それがここで問題になるのは「さまざまな領域を区分けし、思惟可能なものの総体をはっきり限定してわれわれの前にもたらし、そのあと取り扱われるべき意義の領域にその場所をあてがうためだけでしかない」(154)のである。⁽⁹⁾

学士論文と教授資格論文の関係は、もちろんそのテーマである判断論と意義論の関係の問題ではあるが、ハイデッガーはこの意義論において判断論を展開発展させるより、むしろ一歩下がってその内部の検討に入っていく。学士論文の最後において論理学の課題は「命題の一義的意味を取り出し、客観的意味の違いやその単純な、あるいは合成された構造にしたがって判断形式を規定し、体系にもたらしこと」(127)と規定され、その論理学のための真の準備作業は「語義の一義的な規定と説明によって」(127)遂行されると述べられている。あとの課題を引き受けるのがドゥンス・スコトゥスについての意義論の目的であった。思うに学士論文において心理主義批判の目的は一応達したが、妥当する意味存在様式については積極的に十分規定するまでにいたらなかった。この反省からハイデッガーはもう一度論理学の基礎を固め直そうと

したと思われる。このような基礎のうえに「純粹論理学」が構築されるならば、学士論文において述べられていたように「より大きな確実性でもって認識理論的問題に近づくことができ、<存在>の全領域をそのさまざまな現実性の在り方へ分岐させ、その特有性を鋭く際立たせ、その認識の様式とその認識の射程を確実に規定することができる」(128)と構想されうるのである。

さて、ハイデッガーはここでドゥンス・スコトゥスの『思弁方法 (Grammatica specurativa)⁽¹⁰⁾』をテキストに考察を進める。しかしそれは史的 (historisch) 考察ではなく、「純粹に哲学的」(149) な性格のものである。⁽¹¹⁾ ところでなぜドゥンス・スコトゥスなのか。ハイデッガーは「すべてのスコラ学者のなかでもっとも鋭敏」(ディルタイ) といわれる彼のなかに「まぎれもない近代の特徴」(145) を見、そしてさらに彼において「カテゴリー問題を扱うためのすべての前提条件が与えられている」(145) ためであった。その近代の特徴の一つとは、「現象学的考察の契機」(144) である。ハイデッガーは中世スコラ哲学のなかに現象学的発想がすでにあったことを確認すると共に、現象学を哲学史的に位置づけようとするのである。⁽¹²⁾ ハイデッガーは、まず考察をカテゴリー論から始める。思惟可能なもの一般は、さまざまな現実性領域に分かれ、それらはそれぞれ固有の構造と体制を持っている。その数と位置づけについて最初の体系的な考察は、アリストテレスのカテゴリー論である。これが中世はもとよりカントにみられるように西欧哲学全般を規定してきたのである。だが「アリストテレスのカテゴリーは、特定の領域の特定のクラスとしてあらわれているだけであって、カテゴリーそのものとしてではない」(153) のである。アリストテレスの10のカテゴリーは、実在の対象にのみあてはまるにすぎない。ドゥンス・スコトゥスもこのことをはっきり意識していた。論理学の対象たる「志向的なものの領域は、別の秩序形式を必要とする。それどころかそれは独自の対象領野をあらわす。志向的なものはそれだけで認識と定義が可能である。論理学そのものがしたがって固有のカテゴリーを必要とする。論理学の論理学がなければならぬ」(229f.) ドゥンス・スコトゥスはこのほかにも「非存在 (non ens)」、「想像形象 (figmenta)」 それに欠如態など非実在的なもの固有の「カテゴリー」の必要性を認識していた。⁽¹³⁾ おそらくドゥンス・スコトゥスがハイデッガーを惹きつけたものの一つは、こうした存在の多様性、豊かさに対するかれの感受性にあったのであろう。

さてハイデッガーはドゥンス・スコトゥスのカテゴリー論にもとづいて、現実性領域を感性界、超感性界、数学的境界それに論理的境界を区別する。前二者は実在性の世界であり、感性界はさらに物理的な領域と心理的なそれとに分けられる。これに対して後二者は、理念性の世界である。これらはともに非感性的で同質的であるが、両者の違いは数学的境界が「量」に基づく同質性であるのに対し、論理的なものの同質性は「志向性」に基づくことによる。志向性こそ論理的領域を特性づける「領野カテゴリー (Gebietskategorie)」(225) なのである。

ハイデッガーはさらにこれらの領域の関係を規定していく。実在的な世界すなわち感性界な

らびに超感性界は、「自然の存在 (ens naturae)」として、「知的な存在 (ens rationis)」に対立する。前者はその存在が心に依存しないが、後者は「心の中の存在 (ens in anima)」である。しかしこれを心理的実在性と混同してはならない。それはフッサール現象学でいうノエマ的意味としてあるのである。意識作用の相関者として、意識に実的 (reel) には含まれず、志向的に保持されているのである。ハイデッガーはさきに学士論文において確保した「妥当する意味」の固有性を——そこではただ相対主義的懐疑論に陥らないよう真理性を守るために要請されたにすぎなかったといつてよい——現象学によって基礎づけることができたのである。ハイデッガーは新カント学派的な形式的妥当性理論を現象学の志向性理論によって充実させ、捉え直すことができたのである。

この知的な存在は、スコラ概念によると「論理的存在 (ens logicum) とも呼ばれ、「減少した存在 (ens diminutum) と規定されて実在性の世界に対してその存在性が少ない。したがってこの世界には属さず、また因果性のカテゴリーなどは適用されない。「ここにおいて、生起、発生および消滅、過程、出来事、要するに自然現象的なものは問題にならない」(218)。それは時間的なものの彼岸に存する。ハイデッガーは論理的存在と実在的世界の関係をスコラ哲学と現象学の理論を用いて説明する。論理的存在は、自然的態度における「第一次の志向 (prima intentio) によって思念されたものである。「眼差しの独特な転回によって」第一次から第二次への志向の転換がはかられ、「思惟がその固有の内実に向うことが可能となる」(221)。こうして「形而上学的、自然的、心理的な客観世界のすべての現実存在するもの、数学的な諸対象、さらには論理的諸対象すら」も「第二次の志向」の領域に取り入れられる。およそ認識されるものは、この意味の世界に入らなければならない。論理的存在はその「減少した存在」ゆえにかえてすべての対象に対して妥当化性格 (Hingeltungscharakter) をもち、諸対象を意味の世界に取り込むことができるのである。ドゥンス・スコトゥスはこの性格を、「<論理的存在>と諸対象との互換性 (Konvertibilität)」と規定し、前者の后者に対する「絶対的支配」を主張するのである (221)。両者は同じ存在位相に属さず、前者はフッサールの意味で超越論的存在である。これを心理主義のように心的実在性と解すると、実在性相互の間にどうして妥当関係が成り立つのかが分からなくなってしまうのである。

この論理的なものすなわち意味が、実在的对象界に妥当することが実現される場は判断である。判断の成分がカテゴリーである。すなわち判断は、カテゴリーを組み立てることによって意味を実現し、他方この意味は対象への妥当化性格をもつのである。そこで媒介の役割をするカテゴリーは、対象界の質料によって「その意義において (in ihrer Bedeutung) 規定され、だからこれこそに再び適用可能である」(222) が、とはいえその模倣ではない。実在的对象界はただそれに「動因 (occasio)」を与え、跳躍点を提供するだけである。カテゴリーはそこに十全な対応関係を持っていない (223)。このカテゴリーと意味が所与としての質料に「絡みつき」(223)、対象を支配するのであり、これが妥当するということである。

3

そこでハイデッガーはこの関係をもっと詳しく見るために意義論に入っていく。まずここでハイデッガーは意義論を「文法」と同義で使用している (149, 152)。したがって意義論は、言葉の領野をその活動範囲とする。ことばは言語形態 (Sprachgestalt) と言語内容 (Sprachgehalt) から成り立っている。後者が意義である (249)。語が意義を担い、判断によって語の複合体としての命題が形成され、意味が成立するのである。意味を問題にするのが論理学であり、意義を問題にするのが意義論としての文法である。命題のなかに語が含まれ、意味 (Sinn) のなかにその構成部分として意義 (Bedeutung) が含まれるがゆえに (232)⁽¹⁴⁾、意義論は論理学に含まれることになる。「意義論はしたがって、論理学との密接な関係に入る。いやそれどころか、論理学が論理的意味の理論として把握され、その理論が自らのうちに意味成分の理論 (意義論)、意味構造の理論 (判断論) それに構造分岐とその体系的形式化の理論 (学問論) を含むかぎりにおいて、その部分領野に他ならない」(279)。本来的にいうと、判断が論理学の「細胞、その根源形態」(210) であるなら、論理学は判断論から始まるわけで、意義論はそのための準備作業でしかない。ハイデッガーによれば、認識とはすべて判断であり、そこでのみ真理が可能となる。にもかかわらがかれが意義論を取り上げるのは、認識があくまで対象の認識であり、そのかぎり「意義領域と対象の存在との関係について決定が下されることが不可避免的に要求される」(249) からである。意義論は論理学に解消されない。ハイデッガーも「ドゥンス・スコトゥスは文法を論理学のなかに組み込んでしまおうとしたのではなく、意義の論理的構造を了解しようとしたのである」(282) と述べている。

「意義論は論理学の基礎的領野を仕上げる」(282) ことをその任務とする。基礎的というのは、意義論が上記の広い意味での論理学の基底を成すとともに、論理学がそこに立脚している圏域 (Sphäre) すなわち対象の存在と境を接しているからである。ハイデッガーはこの絡み合いをスコラ哲学の概念を用いて解明していく。意義は、具体的には語義として各々の品詞において実現される。各品詞間の関係づけの法則が文法であるが、意義に形式を与え、それを秩序づけるものが「意義の様相 (modus significandi)」である。これはさらに能動の様相と受動の様相とに分けられる。前者は「意義の能作 (Leistung) としての意義作用」である。後者は「その能作の結果、作用の对象的相関項」である。それぞれは意義の主観的側面と客観的側面をあらわす。ハイデッガーはこれをフッサールの「ノエシス-ノエマ」関係として捉えている (251f.)。「作用としてのこれ (意義の様相) は、特定の質料によって規定されていなければならない。すなわちどの意義の様相にも存在の様相 (modus essendi) が対応している」(253)。だが存在の様相といっても対象そのものではない。ドゥンス・スコトゥスは表現の意義は、対象そのものにかかわるのか、それとも認識の相において与えられた対象にかかわるのかという問いを提出して、後者を肯定している (258)。存在の様相は、「認識の様相 (modus intelligendi)」を介

してはじめて意義の様相を規定することができるのである。意義がかかわるのはあくまで認識された対象であり、その限りにおいてでしかない。そこでハイデッガーはドゥンス・スコトゥスに基づいて、認識の様相をまた能動的と受動的の二面に分ける。そしてこの受動的様相が、存在の様相に他ならないとされる。(259)。そして意義の受動的様相も結局その内容からいえば、それらと同一であるとされる。すなわち質料にあたるものである。ただ実際は形式による規定性なしではありえないことを忘れてはならない。基本的な三つの様相の関係をハイデッガーは次のように述べている。「所与性(存在の様相)を手引きにして——これはそれ自身ではただ認識されたものとして(認識の様相において)のみ所与性であるが——意義形式(意義の様相)が読み取られる」(263)。

こうしてハイデッガーによれば、ドゥンス・スコトゥスはいわゆる模写論の立場を採らない。「<所与性>ということがすでにカテゴリーの規定をあらわす」(260)わけであり、認識の観点から独立した対象そのもの、カント的物自体に近づくことはできないのである。まさに「内在思想(Immanenzgedanken)」の立場に立つ。しかしそれはハイデッガーによれば「外界を一介の夢へと霧散させる」ことではなく、「妥当する意味の絶対的優位」を通して「真理の絶対的妥当、真正な客観性を断固として基づけること」である(215)。だがハイデッガーのこの言明はたんなる主張か、でなければ一種の同語反復にとどまっている。模写論のように自体的な客観的実在を素朴に前提しないことによって、それが孕む無限後退(regressus in infinitum)のアポリア(判断Aとその判断対象Bとが一致しているかどうかは、判断Cが必要。しかしその判断Cがその事態と一致しているかどうかは、さらに別の判断Dが必要。以下無限。)を避けることができた。だが「認識されていない客観は、わたしにとってなんら客観ではない」(215)とするならば、ではいったいこの客観の認識はどうして可能となるのか。ハイデッガーは存在の圏域と論理的なもの(意味)の圏域が直接関係するのではなく、そのあいだに意義的な圏域をその媒介者にして置く。いわば幹と大地が直接結びつくのではなく、意味としての幹がその構成部分である諸意義という根を通して大地から養分を吸収するのである。しかし根と大地との結びつきはどうなっているのか。意義の圏域自体が一方で意味の圏域に属するとともに、他方で意義は具体的には語として感性的実在的在り方をし、存在の圏域に連なっている。大地と根との間に双方にまたがり、それらを媒介するものとしてのことばの存在とその働きが問題になってくる。

4

まずハイデッガーはことばについての考察を、「哲学はことばにどのようにまたどれだけかわるのか、またそもそもかわりうるのか。さらに意義論の論理学に対する関係はいかに考えられうるのか」(245)という基本的視座に立ってすすめる。その場合考察の仕方として、「ことばがどのように生成してきたのか」という「発生的な説明(Erklärug)と「ことばは

なにをなすべきか」という「目的論的な了解 (Verstehen)」の二つの道が考えられるが、ハイデッガーによれば後者の方が完全ではないにしても「真の<根源>への道」である。⁽¹⁵⁾

ハイデッガーはこれまでの考察で論理的存在、すなわち意味および意義の固有現実性を確証した。それは実在界のどこにも見出されない。だがそれはどこか空中に漂うようなものでも、また意識内のたんなる心的表現でもない。ハイデッガーはボルツァーノ＝フッサール流の極端なイデア主義の立場も、先述のように心理主義の立場も採らない。論理的存在をなんとか存在領域全体のなかに位置づけようと腐心するのである。学士論文では、妥当する意味はコブラとしての「ある」に見出された。論理存在がこの「ある」に、すなわちことばになって具現されているのである。「意味と意義とは言語的形象 (Gebilde) を通じて表現可能である。これらの言語形態 (Gestalt) は、意義と意味を持った形象として語の最も広い意味での表現である」(232)。意味や意義と文や語とは「謎深い共在」(232)にある。ここから意味や意義の世界とことばの世界の関係が問題になる。

論理的 (意味や意義) と文法的 (ことば)、それに対象的 (事物) 圏域の三者の関係について、ハイデッガーは次のように述べている。「言語形象は意義や意味のしるし (Zeichen) である。意義はさらに対象の<しるし>である」⁽¹⁶⁾(237)。そして「事物は思想のなかに立ち、思想は語や命題に付着している」(237)。たとえば「木」という語は、「木」という意義 (概念) を指示し、後者はまた実在的な「木」なるものを前者とは別の仕方でも指示するのである。そこでハイデッガーは、このしるしとは何か、さらに「語はどのようなしるしなのか」(241)を問う。しるし (記号) 一般に属する特徴として、彼は指示という関係性格とそれに基づいて認識が始まることから認識の基礎性格の二つを挙げている。そのうち関係性格については、指示するものと指示されるものとの関係が、実在的な場合と純粹に思想的な場合が考えられる。前者は煙と火のような場合である。後者は「修道士のウィンク」のような場合であり、ここでは指示されるものへの一義的指示関係はない。

そのなかで語はどのようなしるしなのか。それは聞かれうる声として、あるいは見られうる文字として存在するかぎり、感性的在り方を持っている。だがそれだけではなにもも指示しはしない。それがしるしとなるためには、フッサールのいう「意義賦与作用 (der bedeutungsverleihende Akt)」が必要となる。それによってなにかが語に伝えられ、表現となるのである。「表現とは、しるし (Zeichen) としるしづけられたもの (Bezeichnetes) とのまったく独特な種類の統一である」(241)。したがって表現は実在的關係の場合 (煙と火) のような「指示的しるし (das hinweisende Zeichen)」ではなく、「有意義なしるし (das bedeutsame Zeichen)」(フッサール) である。

ハイデッガーはことばから言語形態 (感性的な音や線) と言語内容 (イデアールな意義) の二側面を取り出し、それをフッサールのいう意義賦与作用によって結びつけようとするのである。すると前者はそれ自体無意味で、意義にとっても外的なたんなる容器でしかなくなる。た

しかに論理的存在の純粹性を堅持しようとするかぎり、そう考えざるをえないであろう。「この論理的形象は、たとえそれがことばとして表現にもたらされなくとも固有の現実性を持っている。それはくより先なるもの>であり、その存立のために、すなわち最終的にその妥当のためにことばを必要としない」(233)。実際ことばのもつ感性的-時間的性質や各国語がそれぞれ具有する多種多様な特殊性を見れば、ことばの「非論理的 (alogisch) 性格」(237) を否定することはできない。ここからことばをできるだけ純化すなわち数学化しようとする記号論理学の試みも生まれてくるわけである。

だが、レアルな言語形態とイデアールな言語内容をまず対置して、つぎに両者を合成してことばを成立させるといった捉え方ではたしてことばの本質が捉えうるであろうか。「純粹な音」とか「純粹な線」とはいったいなんであろうか。⁽¹⁷⁾まったく意義を欠いているならば、それは意義を充たすことすらできないであろう。ハイデッガーはまだここでは「形式-素材」(形相-質料) という伝統的対立図式を脱却できず、ことばについてもその図式をそのまま適用してしまっている。それゆえこの表現の存在様式の固有性を把握できない。せいぜい「たんなる感性的に知覚された語音に対する了解された意味的表現の余剰 (das Mehr)」(250) としてしか規定しえない。ハイデッガーはこれまでずっとレアルな世界に対してイデアールな世界の固有性を守ることに努めてきた。しかし両世界が絡み合うことばの領域については、その固有性に気づかず両世界の合成としてしか理解していないのである。

もっとも、ハイデッガーもことばを「意義を持った語 (表現) の有機的全体」(246) であると規定している。文字通り有機的なものとして、自ら固有の命を持ったものである。そこで「ことばの発展の創造的契機」としての「言語精神 (Sprachgeist)」(281) を認めなければならないであろう。ことばは外から命 (意義) を吹き込まれる必要などなく、自ら意義を生み出していくのである。意識による意義賦与作用をもちだすまでもなく、それ自身が「意味創設的」である。⁽¹⁸⁾そのために「ことばの論理学」(281) が必要となろう。ことばはそれ自身の固有の論理的構造を持ち、それにしたがって意味的なものを生み出していくからである。したがってこの論理学は従来の形式論理学と違って、歴史的-発展的性格を持つものである。ただここではこれらのことはたんなる指摘にとどまっているのである。⁽¹⁹⁾

意義を賦与する純粹意識の立場に立てば、感性的性質を持たざるをえないことばは曖昧さを生む元凶ということになろう。だがこの性質こそことばの豊饒性の根拠なのである。ことばが多義的であること、それは誤解の原因であるとともに、他方豊かな可能性を蔵していることでもある。また「減少した存在」(ドゥンス・スコトゥス) としての論理的存在は、まさにそれゆえに対象界に妥当するとともに、その欠如的存在性ゆえに実在的支えを必要とするのである。純粹意味なるものは極限概念でしかなく、フッサールもこの時期のハイデッガーも希求した「純粹論理学」およびそれに付属した「純粹文法」の構想も見果てぬ夢でしかないだろう。ことばにおいて、十全な存在性を欠いた論理的存在とそれ自体はいわゆる意義を欠いた言語形態 (音

や線)が抽出される。それがソシュールのいうシニフィエーシニフィアン構造であるが、両者は事後的分析によってはじめて抽出されるだけで、それらがまず自体的にあってことばを作り上げているわけではないのである。たとえば文字は、じっと見つめることによってただの線として現出してくる。意味が剥脱したのである。根源的経験は有意味的である。意味を欠いたものにまず定位することは、ちょうど絵画や彫刻を絵の具や木から理解しようとするようなものである。⁽²¹⁾

ハイデッガーは新カント学派の形式論的な妥当 (Geltung) 理論から出発して、フッサールの志向性理論を媒介にしてそれを妥当化 (Hingeltung) 作用として積極的に捉え直した。そこで成立するノエマ的意義を、志向的意識の能作 (Leistung) すなわち成果とみなした。しかしその成果としての表現は、純粹意義が感性的外皮に包まれたようなものでしかなかった。だが表現はこの両者を構成契機としつつ、独自のそして高次の存在として創造されるのである。ことばはこの創造的表現世界の一つ、いやそのおそらく最初の現実化であろう。⁽²²⁾そしてこの世界の固有現実性を確認することによって、従来の二分法的捉え方がのりこえる可能性が生じる。一方でマテリアルな世界を置き、他方で純粹意味の世界を対置するという問題設定では、表現的世界 (ことばや芸術) を適切に捉えることはできない。フッサールの志向性をさらに積極的に捉え直して、そこを創造の圏域とみなさねばならない。それは形式でも質料でもなく、また両者の混淆でもない独自の圏域である。それはレアルとイデアールの両世界から動機づけられているが、それらに還元されない。ちょうどイデアールの世界が、レアルな世界に対してそうであったように。こうしてそれぞれの圏域がお互い動機づけられあひながら、しかも互いに固有性を保ち、他に還元されないというフッサールのいう「基づけ (Fundierung)」の関係にあるのである。しかしハイデッガーはここではまだことばを固有のカテゴリーで表現できず、「共在 (Beisammen)」⁽²³⁾ とか「付着 (Haften)」⁽²³⁾ といった、ハイデッガー自身が批判していた実在性のカテゴリーで規定したにすぎない。

もっともハイデッガーは形而上学的対立図式の限界に当初から気づいており、別の道をここでも模索していたのも事実である。げんに彼がドゥンス・スコトゥスを問題にしたのも、そこに彼の問題意識と共通するものを見出だしたからである。「論理的意味形象と文法的言語形象の領野の区別が、その異質な性格を明らかにするうえでどれほど必要かつ価値あるものであろうと、認識とその叙述に生きるやいなや、その区別はやはり再び止揚され、いわば忘れられねばならない。そこでは言語対象の非論理的な性格は消える。それはまったく独特の機能を持った実在性として、すなわち意義と意味形象の担い手としてあきらかになる」⁽²³⁾。ことばへのかかわり方において、まず定位すべきは「実際の話のなかに生きているもの」⁽²³⁾ であり、そのものにとって先の区別は「一つに融合している」⁽²³⁾ というより、事後的分析の結果としてはじめて導きだされるにすぎない。⁽²⁴⁾

意義や意味ではなくことばそのものにまず立ち向うことは、まだフッサールの現象学的言語

観に規定されていたハイデッガーにはできなかった。論理的存在の純粋性に固執するかぎり、ことばの次元は恣意的で不純なものでしかなかった。結局外皮としてのことばより、その核心としての意義のみが重要であった。そして意義論(文法)は論理学(判断論)包摂されざるをえなかった。だがそれ自身感性的性質を備え、いわば独特の身体を持ったことばは独自の働きをするのである。ただハイデッガーも語の意義が、直接的所与の無限の多様性に及ばないが、すでにそれに対して「一定の形式化と変形」を加えていることを認めてはいる(248f.)。こうしたことが可能なのは、「意義そのもののなかにすでに形式内容(Formgehalt)が潜んでいなければならない」(249)が、ハイデッガーはこの形式内容が具体的になんであるかは述べていない。言いうことは「ことばの語義がすでに所与のカテゴリー的⁽²⁵⁾形成」として存在の圏域に根をはり、その根が分枝することによって存在の圏域を文節しているということである。ことばがその有限性をいわば逆手にとって、無限の多様性を呈する所与をまず構造化するのである。常識に反してことばは認識の後に来るものでなく、むしろその前にくるもの、あるいは最初の認識とさえ言いうるのであろう。この時期のハイデッガーはことばの問題圏が気づきながら、その内部に踏みこまなかった。それが後にこの時期の試みを「途方に暮れた」(IX)試みと述懐せざるをえなかった一因であろう。

5

ハイデッガーは「カテゴリー問題」と名づけられた結びを、あとから付け加えている。それはこれまでの叙述とは性格を異にする内容を持っている。本文において、意義論のための準備作業でしかなかったカテゴリー論が、今度は意義論を自らのうちに止揚するかたちで改めて主題化されてくるのである。これまでは論理学的研究として認識論的観点に立って「深く及ぶ形而上学の問題関係の意識的な排除」(343)を行なってきたが、そこではっきりと認識論から存在論への観点の転換を表明している。「哲学はその本来の光学、すなわち形而上学を永い間欠いたままでいることはできない」(348)。認識問題から形而上学の問題へと「押さえがたく駆り立てられた」(348)とラスクについてハイデッガーが語っていることが、彼自身にも当てはまるのである。ニーチェのいう「哲学する衝動」(138)が自らのうちにはっきり自覚されてきた。彼は次第に「認識問題の形而上学的完結の必要性」(345)を意識するようになる。そこでは認識論的主観をそのたんなる一部にする「生ける精神」が問題として前面に出てくる。この論文全体がリッカートに捧げられているにもかかわらず、いやそれゆえにこそハイデッガーはここでリッカートの哲学および認識論から袂を分かつのである。ただし「超論理的⁽²⁷⁾(translogisch)」(347)なものをいきなりめざすのではなく、それ以後は論理学批判という仕方ですんでいくのである。

「結び」の「カテゴリー問題」は三つの課題を提起している。第一はカテゴリーが対象領域を画限すること、第二はカテゴリーを判断問題と主観問題とにかかわらせること、最後にカテ

ゴリーを歴史と歴史の文化哲学的一目的論的解釈から考察することである。第一の課題は、本文において大体展開された。第二もハイデッガーが繰り返し強調してきたことであるが、彼自身十分に展開できたとは思っていないようである。そして第三の課題こそ「結び」ではじめて登場してきたものである。ハイデッガーはこれまで意味の妥当性を基礎づけようと努めてきた。論理的世界は一切の経験的なもの、したがって歴史的なものにも依存せず、時間的一歴史的なものの彼岸にあるとされてきた。しかし認識論的主観が生ける精神の一部にすぎなく、さらに生ける精神が「本質的に語の最高の意味での歴史的精神」であるならば、論理的世界をこのような意味での歴史的世界のなかにどう位置づけるかが問題となる。こうした問題設定から必然的に浮かびあがってくるのがヘーゲルとの関係である。「生ける精神の哲学」と「その根本傾向から導き出されたカテゴリー論」は、「深さ、体験の豊かさ、概念形成といった豊富さの点でも最も力強い歴史的世界観の体系であり、先行する基本的哲学的問題動機のすべてを自らの内に止揚しているもの、すなわちヘーゲルとの原理的対決という大きな課題の前に立っている」のである(352f)。ハイデッガーはヘーゲルとは違った哲学と歴史の関係すなわち「価値妥当」と「価値形成」の関係(352)を模索する。そしてかれは、存在(Sein)と価値(Wert)または当為(Sollen)といういわば平面的な新カント派の対立図式を時間一歴史概念で根源的に捉え直し、より深い意味での歴史的精神の両構成契機として発展的に位置づけることによってのり越えようとしたということができよう。その後の『存在と時間』の実存論的分析論と存在論の歴史批判の二部構成の叙述方法も、ヘーゲルの道を意識すると同時に、それとは別の道を志向しようとしていることを示している。そして哲学と歴史の問題はハイデッガーにとって終生続く課題となるのである。

たしかにハイデッガーの『初期著作集』は、彼の習作時代のものとしてのり越えられるべきものであったろう。しかしそこにすでに彼のその後の思惟傾向の萌芽が宿っていることが忘れられてはならない。とりわけことばの問題は、『存在と時間』におけるよりずっとはっきりあらわれており、「ことばへの道」こそ結局彼の本来の道であったと見るならば、この時期こそ彼の哲学の出発点であり、『存在と時間』はむしろフッサールに影響されて逸れてしまっていると見ることもできるであろう。その後ハイデッガーが『存在と時間』へと進んでいったということは、彼にとって唯一の道であったわけではない。そこでは「カテゴリー問題」でいわれた判断と主観問題への関わりが、つよく前面に押し出て、フッサールの超越論的主観性の立場を基本的には踏襲しているといつてよい。だがもともとハイデッガーは、そうした立場をはっきり宣言した『純粹現象学および現象学的哲学の構想(Ideen)』(1913年)より『論理学研究』を評価していた⁽²⁸⁾。かれがそこで惹きつけられたものは、ある特定の立場に立つことなく事象そのものへ虚心に迫ろうとする精神であった。ドゥンス・スコトゥスに見たのも同じ精神であったといつてよい。志向性の領野にとどまり、その構造を純粹かつ「目的論的」(266)に解釈することによってたんなる領域的諸存在論の分類におわらない、といつて『存在と時間』の「基

礎的存在論」とも異なった多元的・多層的存在論が構築されうる可能性もあったのである。そしてこの可能性を切り開く突破口こそ、初期ハイデッガーが不問にしておいたことばの謎に潜んでいたのである。ことばの謎を通して、それによって開かれる表現的世界こそハイデッガーが本来めざしていた世界なのである。

註

- (1) この初期ハイデッガーもさらに二時期に分けることができる。『初期著作集』に収められた論文が相次いで書かれた修学時代と其後の『存在と時間』に至るまでの10年余りなにも公刊しなかったいわゆる沈潜期とである。ここでは前者に焦点を合わせて論究を試みる。
- (2) 沈潜期においても講義や演習で論理学的問題をアリストテレスおよびプラトーンに関連づけて行なっている。Cf. Richardson, W. J.: *Heidegger*, The Hague, 1967, pp. 663-665.
- (3) Vgl. Schweppenhäuser, H.: *Studien über die Heideggersche Sprachtheorie*, München, 1988, S. 8.
- (4) Heidegger, M.: *Unterwegs zur Sprache*. 4. Aufl., Pfullingen, S. 92.
- (5) Heidegger, M.: *Sein und Zeit*, 11. Aufl., Tübingen, 1967, S. 1.
- (6) Heidegger, M.: *Frühe Schriften*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1972. (なお、この書からの引用は本文中にそのページ数を記した。)
- (7) 19世紀から20世紀初頭にかけての哲学的潮流(現象学や論理実証主義など)は、それぞれの立場から論理学の再構築をめざしている。
- (8) 心理主義の問題は、「自然的態度」(フッサール)や「ひと(das Man)」(ハイデッガー)の問題と密接に絡む。ハイデッガーから見れば、自然的態度はたんに括弧に入れて片付くことではなく、現存在の最も根深い存在傾向である。この現象を顧慮せずして、意識ないし現存在の分析は具体的内実を欠いたものになる。フッサールもやがて現象学的心理学を超越論的現象学の前段階に位置づけ、この問題性を取り入れようとした。
- (9) ただし、最後に「カテゴリー問題」が「結び」としてこれに付け加えられることになる。ハイデッガーは「カテゴリー論」が「意義論」にその理解のための基礎として先遣されるからといって、「二つの領野の論理的順序(Zuordnung)」(154)については決定されないとして、問題をそのままにしてる。
- (10) これはのちにM. グラープマンによってT. v. エルフルトの著作であることが明らかにされた(Vgl. Pöggeler, O.: *Der Denkweg Martin Heideggers*, Pfullingen, 1963, S. 300, Anm. 2.)。ところで以下においては、ドゥンス・スコトゥスおよびカレに帰されていたこの著作についてのハイデッガーの解釈の正当性については問わない。むしろここでハイデッガーがそれらをもとに自らの哲学的立場をどのようにして形成していったかに焦点をあわせて考察をすすめる。
- (11) ハイデッガーはすでに「史的」と「歴史的」(geschichtlich)の違いに気づいている。「より深く捉えた歴史」は「純粋に哲学的なもの」と矛盾するどころか、かえってそれを要求するのである(vgl. 149)。
- (12) ハイデッガーははじめから現象学をこのように「西洋哲学へのその帰属性へ引き戻す」ことを試みていた。むしろこれは、現象学の根本的な新しさを主張するフッサールとは相容れぬ考え方である。Vgl. Heidegger: *Unterwegs zur Sprache*, S. 95.
- (13) ハイデッガーはのちに『存在と時間』において、この考えを「内世界的存在者」に適用される「カテゴリー(Kategorien)」と「世界内存在」に適用される「実存カテゴリー(Existenzialien)」の区別として具体化する。
- (14) ハイデッガーはここで意義を複数形で多く用いているのに対し、意味はほとんど単数形でしか

- 用いていない。したがって諸意義の統一体が意味と考えられている。
- (15) なぜ完全ではないかといえば、「論理学の立脚点から考察」(247)からである。ハイデッガーはここで解釈学的立場の意義を認めているが、まだ伝統的論理学の制約を脱しておらず『存在と時間』のように解釈学が自立したものとして打ち出されていない。
- (16) 対象のくしるし>と括弧でくくられているのは、もちろん前者の場合のような直接的関係ではないからである。
- (17) 『存在と時間』において、普通の状態では「純粋な雑音」を聞くことはできないと述べられている。Heidegger: *Sein und Zeit*, S. 163.
- (18) Kapferer, N.: *Denn eigentlich spricht die Sprache*, Frankfurt am Main, 1984, S. 22.
- (19) これが後に『存在と時間』において「解釈学的」論理学として提起されるのである。初期著作集における解釈学的発想や概念については、S. 153f., 247, 343参照。
- (20) ドゥンス・スコトゥス=ハイデッガーの場合、そこにすでにラテン語がヨーロッパの各国語に対して基礎的な普遍語として自明のごとく前提されていたのではないか。純粹意味の世界はこの自明性の上立った一種の錯覚であるといえよう。「論理学はことばの影を飛び越すことはできない。」(Schweppenhäuser. H; a. a. O., S. 29, vgl., S. 35.)
- (21) こうした捉え方は『存在と時間』でようやく物的眼前存在者に対する道具の手許存在者の根源性として展開されている。道具は、物プラス価値としては捉えられない。ただ道具的存在者もまだ表現的存在者(芸術作品など)ではない。そこには自存性が欠けている。
- (22) のちにハイデッガーは「ことばそのものが本質的な意味での詩である」と述べている。Heidegger: *Der Ursprung des Kunstwerkes*, Stuttgart, (Reclamausgabe), 1977, S. 85.
- (23) Schweppenhäuser: a. a. O., S. 22.
- (24) Ebd., S. 24f.
- (25) Ebd., S. 35.
- (26) グレイシュはハイデッガーにおける「現象学が存在論に変わりうる転換点は、カテゴリー的直感の概念によって極めて正確に記される」と述べている。たしかにここでいうカテゴリー論は、従来のような形式的で内容を欠いたものではない。Greisch, J.: *Laparole heureuse*. Beachesne, Paris, 1987, pp. 40-41
- (27) 献辞の説明ですでに、「私自身の<立場>の完全に自由な保持」(Vorwort. 133)ということわり書きをつけている。「結び」においても、新カント学派の問題性を「もっと深い」生ける精神の哲学によって捉え直す必要性を暗示している(347)。なお献辞に秘められた両義性(感謝と訣別)は、『存在と時間』のフッサールについても言うことである。
- (28) 論理と時間の関係はその後のハイデッガーの論理学研究(批判)の主要問題となる。Vgl., Vukičević, V.: *Logik und Zeit in der phänomenologischen Philosophie Martin Heideggers* (1925-1928), Hildesheim, 1988.
- (29) 同じ問題意義をすでにニーチェがもっていた。「生成に存在の性格を刻印すること——これが最高の力への意志である。」Nietzsche, F.: *Der Wille zur Macht*, (Kröners Taschenausgabe) Stuttgart, 1964, S. 418.
- (30) Heidegger: *Unterwegs zur Sprache*, S. 90f.